河合隼雄を読む：これだけは読んでおきたい文献集

山下一夫*

I 広大で豊穣な世界

河合は著作集を2回にわたり出版している。最初の『河合隼雄著作集／全14巻』(1994～1995, 岩波書店）は，心理療法とユング心理学入門，子ども・ファンタジー・昔話，日本人と日本社会，宗教と科学，人間のライフサイクル，から構成されている。次の『河合隼雄著作集第Ⅱ期／全11巻』(2001～2004, 岩波書店）は，ユング心理学と心理療法の世界，子どもと生きる，神話と物語の深層，物語と多層性，日本人の心と文化，から構成されている。

一般書も多数出版しており，例えば，『働きざかりの心理学』(1981, PHP研究所)，『こころの処方箋』(1992, 新潮社)，『こころの子育て』(1999, 朝日新聞社）などがある。

講演をもとに文章にした本として，『カウンセリングの実際問題』(1970, 誠信書房)，『カウンセリングを語る／上・下』(1985, 創元社)，『河合隼雄のカウンセリング入門―実技指導をとおして』(1998, 創元社）などがある。

対談をまとめた本も多数ある。著作集と同様，対話集も2回出版しており，『河合隼雄全対話／Ⅰ～Ⅴ』(1989～1991, 第三文明社)，『河合隼雄全対話／6～10』(1996～1999, 第三文明社）がある。そして，この『全対話』以外に，小此木啓吾，谷川俊太郎，村上春樹，中沢新一，鷲田清一らとの対談を，それぞれ一冊の書物として出版している。また，河合が還暦のときに出版した『あなたが子どもだったころ』(1988, 光村図書；1991, 楡出版）は，鶴見俊輔や田辺聖子らとの対談をまとめたものである。その他，多くの人と対談，鼎談，シンポジウムなどを行い，本にしている。

代表で編集した出版物には，わが国の臨床心理学を初めて集大成したと言える『臨床心理学大系／全20巻』(1989～1992, 2000, 金子書房）や，『講座心理療法／全8巻』(2000～2001, 岩波書店）などがある。また，1974年に京都大学教育学部心理教育相談室紀要『臨床心理事例研究』を創刊したが，まさに現在，各指定大学院が刊行している相談室紀要の先がけである。そして，事例発表とコメントによる『箱庭療法入門』(1969, 誠信書

Must-read Kawai Hayao for Clinical Psychologist

* 鳴門教育大学大学院臨床心理士養成コース，Kazuo Yamashita：Course of Training and Practice in Clinical Pschology, Naruto University of Education

房），『心理療法の実際』（1977, 誠信書房），『事例に学ぶ心理療法』（1990, 日本評論社）などを出版している。ちなみに，2001年に創刊された本誌『臨床心理学』（金剛出版）も編集委員を代表していたのが河合であり，その号の特集は「事例研究」についてである。

翻訳も，Klopfer & Davidson『ロールシャッハ・テクニック入門』（1964, ダイヤモンド社），Jung 他『人間と象徴』（1972, 河出書房新社），Jung（Jaffé 編）『ユング自伝／1・2』（1972～1973, みすず書房）などがある。

逆に，河合の著作のなかには，英語，ドイツ語，フランス語，韓国語，中国語で出版されているものもある。

Ⅱ　河合隼雄についての案内書

著作集の全25冊を加えたにしても，単著だけで約80冊を数える。著作のうえだけでも，河合はとてつもなく広大で豊穣な世界，カワイ・ワールドを形作っており，我々はこの上ない知恵と希望をここから得ている。しかし，あまりにもその世界が広大であるがゆえに，今から河合の著書を読もうとする人にとって，何から読んでいいのかわからずに困惑しているのではないか。

河合とその著書について論じた本もあり，まさに河合隼雄についての案内書（ガイドブック）であると言える。『河合隼雄　その多様な世界』（1992, 岩波書店）では，河合が「現代人と心の問題」について講演し，その後「河合隼雄とは？」というテーマで，今江祥智・大江健三郎・中村桂子・中村雄二郎・柳田邦男の5人のパネリストとともにシンポジウムを行っている。『河合隼雄を読む』（1998, 講談社）では，筒井康隆・河合雅雄ら30人が，それぞれ河合の書物を一冊取り上げコメントしている。

『河合隼雄　こころの処方箋を求めて』（2001, 河出書房新社）では，河合自ら次の12冊の本を選んでいる。『ユング心理学入門』（1967, 培風館），『影の現象学』（1976, 思索社），『昔話と日本人の心』（1982, 岩波書店），『中空構造日本の深層』（1982, 中央公論社），『子どもの宇宙』（1987, 岩波新書），『明恵　夢を生きる』（1987, 京都松柏社），『とりかへばや，男と女』（1991, 新潮社），『心理療法序説』（1992, 岩波書店），『中年クライシス』（1993, 朝日新聞社），『ユング心理学と仏教』（1995, 岩波書店），『日本人の心のゆくえ』（1998, 岩波書店），『紫マンダラ』（2000, 小学館）。

また，幼い頃からユング研究所まで，河合が自らのこころの軌跡を語っているのが『未来への記憶―自伝の試み／上・下』（2001, 岩波新書）である。

Ⅲ　河合心理療法についての案内書

一般の人なら，上記の案内書を参考にして自分の興味のあるところから読んでいけばいいのであり，そもそも河合の著書を読まねばならないという訳ではない。しかし，臨床心理士で河合の著書を一冊も読んだことがないという人はまずいないであろうし，そのような人がいるとすれば，心理臨床の専門家としての教養や素直さや社会性をつい疑ってしまう。

だが，カワイ・ワールドがあまりにも広大であり，そしてその中核をしめる，河合が臨床実践の経験から築いてきた心理療法の領域も広大であるので，何を読みどのように勉強していけばよいのかわからず困惑している臨床心理士や大学院生は多いのではないか。あるいは，河合の著書を一冊読んでその全体像を理解したつもりになっている臨床心理士もいるかもしれない。

河合の心理療法の全体像を案内してくれる書物として，『心理療法個人授業』（南伸坊と共著；2002, 新潮社），『臨床心理学ノート』（2003, 金剛出版）がある。前者は，南が生徒となって河合に個人授業を受けるという形式で，入門書として異色だが，わかりやすくて含蓄に富む内容である。後者は，本誌『臨床心理学』に連載されたものをまとめたもので，ある程度経験を積んだ臨床心理士が自らの知識と経験を整理するために読むと役立つように思う。しかし，これらは案内書といえ

るものであるので，実際にカワイ・ワールドに踏み込んでいく，つまり河合の著書をどんどん読み進んでいってもらいたい。

Ⅳ　夢の中の師

ところで，筆者がこの拙文を執筆するために『心理療法個人授業』を読み返したその夜に，次のような夢を見た。2007年9月中旬のことである。

河合と南は，落語家であり，師弟関係にある。弟子の南と筆者は重なり合っており，体や顔つきは南だが，筆者でもある。その弟子が河合に「どうすれば落語を間違えないで演じることができますか」と尋ねると，河合は「(筆者が) ドアをノックする仕方はいつも同じだね」と答える。

弟子である筆者は，ハッとして，次のように思う。今まで，自分はノックの仕草は決められたものとして，間違えないようにと思ったかもしれないが，それ以上何も考えてはいなかった。しかし，表面演じているだけで，その役になりきっていないことがあるのではないか，と反省する。さらに，ノックの仕方一つでも創意工夫し，自分なりの落語を創り上げていかねばならない，と反省する。

このあたりで，弟子は南でなく，まったく筆者である。そして筆者が，桂枝雀を思い浮かべ，少々間違えてもそれ以上のスケールの大きさが大事なんだと思っていると，河合はニッコリ微笑んで，「間違えないようにすることも大事だけどね」という。ここで，再びハッとして，目覚めた。

河合は『臨床心理学ノート』で次のように述べている。「筆者（河合）はユング派の分析家の資格をとるために教育分析を長い間受けていた。……帰国後も，夢のなかには重要な意味をもって分析家が登場した。あるいは，難しいケースを考えているとき，分析家と『対話』していることがよくあった。……分析家は筆者の心のなかに内在化されている，ということになる。……筆者の分析家は二人とも他界した。しかし，関係は続いている，と言うことができる。関係は永続している」

Ⅴ　臨床心理士のための著書案内

臨床心理学を学ぶ大学生や大学院生，そして臨床心理士なら，これだけは読んでおきたいという河合の著書を，筆者が独断で選んだものを表に示した。

心理臨床の拠り所とする理論がどのようなものであったとしても，臨床心理士なら，是非これだけは読んでもらいたいというのが『カウンセリングの実際問題』『ユング心理学入門』『心理療法序説』である。

この3冊が河合の心理療法を代表する著書であるのに対し，あたかもそれらと表裏をなすかのように河合が心理療法において感じていることや考えていることを記したのが，『カウンセリングを語る／上・下』，『子どもの本を読む』，『心理療法論考』である。

この6冊の河合の著書を読むということは，単に知識を得るためだけではなく，河合と対話し，そして読者である自分自身の内なる心と対話することになり，自らの人生観・世界観を問い直してみるという行為を行うことになるであろう。まさに，河合隼雄を読み，自分自身を読むのである。

河合は対談のなかで「ユングのいうとおりにしようとは思っていないけれど，ぶつかっても倒れない人をみつけたという意味でユング派だといっています。ユングというのは，私が死にものぐるいぶつかっても倒れないし，まだまだ教えてもらえるし，いってることにも意味がある。でもユングの生きたとおりに生きるとか，ユングのいったことが正しいとは思っていない。そういう意味で明恵もおなじで，日本の師という感じです」（笠原芳光『宗教の森』1993, 春秋社）と述べている。

このような意味で河合派（カワイアン）になってみようと思うなら，表に挙げた『コンプレックス』から『明恵夢を生きる』までの10冊を勧める。

なお，これらの著書を読むとき，心理臨床の専門的知識と経験に応じた難易度の目安を，便宜的に筆者が付けてみた。☆は修士1年生，☆☆は修

表1　臨床心理士のための，河合隼雄の著書案内

1）必ず読んでおきたい3冊
カウンセリングの実際問題　誠信書房　1970　☆
ユング心理学入門　培風館　1967　☆☆
心理療法序説　岩波書店　1992　☆☆☆

2）できるだけ読んでおきたい3冊
カウンセリングを語る／上・下　創元社　1985　☆
子どもの本を読む　光村図書　1985　☆☆
心理療法論考　新曜社　1986　☆☆☆

3）読んでおきたい10冊
コンプレックス　岩波新書　1971　☆
カウンセリングと人間性　創元社　1975　☆
魂にメスはいらない—ユング心理学講義（谷川俊太郎と共著）　朝日出版社　1979　☆
大人になることのむずかしさ—青年期の問題　岩波書店　1983　☆
影の現象学　思索社　1976　☆☆
母性社会日本の病理　中央公論社　1976　☆☆
中空構造日本の深層　中央公論社　1982　☆☆
フロイトとユング（小此木啓吾と共著）　思索社　1978　☆☆☆
昔話と日本人の心　岩波書店　1982　☆☆☆
明恵　夢を生きる　京都松柏社　1987　☆☆☆☆

注：☆が多いほど専門的知識と経験を要する。

士2年生，☆☆☆は臨床心理士になって数年の経験を積んだ頃，☆☆☆☆は臨床心理士として中堅の頃。ただし，星の数の多寡は，本の内容の出来具合ではなく，あくまで読者がこれらの本を読むのに適したと思える年齢の目安である。そして，一度読んだからといってわかったつもりになるのではなく，時を経てから再読してもらいたい。

Ⅵ　『河合隼雄の夢記（ゆめのき）』

河合は，1928年6月23日に生まれ，2007年7月19日に亡くなった。

2007年9月2日に，「故 河合隼雄先生　追悼式」が執り行われたとき，参列者に手渡されたのが『対話する生と死』（1992, 潮出版社；2006, 大和書房から文庫化）である。そのなかで河合は，今後したいこととして次の2つを挙げている。1つは，宮沢賢治と明恵についての本を出版したいということ。もう1つは，『華厳経』の研究である。「明恵上人が華厳宗なので，その理解のために読み始めたところ，じつにおもしろい」と書いている。

今となっては，これらの著書を読むことはできないが，筆者はもう一冊是非読みたかった本がある。それは，『河合隼雄の夢記』である。梅原猛は，訃報に接し，「新しい『河合心理学』を創造する途上にあった。残念でならない」（7月20日付け毎日新聞）と述べている（なお，梅原は7月21日付け朝日新聞に追悼文を寄稿している）。河合心理学の出発点は『ユング心理学入門』であり，その到達点に位置するはずであったのが，まさにこの『河合隼雄の夢記』である，と筆者には思えてならない。

『対話する生と死』のなかで，「必要を感じるときには，夢を記録して考えます。ただ，明恵も，自分の『夢記』だけは，絶対に人に読ませなかったと思いますね。弟子に託して死ぬまで」と述べている。

いつの日にか，河合俊雄『河合隼雄　夢を生きる』の出版を期待しているのは，筆者だけではないと思う。